雑誌『re@lize』

「知らなかった、ロシアがここに　あなたの中の、ロシアがかわる」をテーマに取材から制作まで

専修大学文学部ジャーナリズム学科　植村ゼミナール3年
市川茉乃花、梅本優希、渡邊香月、飯塚直也、田中七海、石井花菜、増渕晴菜、
木村和美、湊梨々子、堤萌恵、水島萌々香、福田詩織、シンジュヨン

1. 雑誌制作目的と背景

「ロシア-ウクライナ問題」は、2022年2月末のウクライナ侵攻より注目され、その悲惨な状況とともに、SNSを中心にロシアに対する強い批判が広がっている。その結果、現在のロシア体制だけでなく、“ロシアのすべてが悪”であるといった印象も形成されてきた。加えて、若者のメディア離れから、SNSの情報を鵜呑みにし、なんとなくロシアに対する心象がよくないという人、ロシアに関心すら寄せない人も多く存在する。

そこで、私たちは雑誌でのテーマを「ロシアについて考えるきっかけ」とし、私たちにとって身近な“ロシア”に関して取材・記事の執筆を行うこととした。

企画から取材やアポ取り、執筆、編集、レイアウト。InDesign制作といった諸作業を通じて、雑誌制作のリアルを体験するとともに、若者の雑誌離れが伝わる中で、どうやったら手に取ってもらえるかという課題にも取り組んだ。

2. 雑誌制作―テーマ決めー

2022年4月に植村より雑誌制作の目標を告げられた。以降、MIEの一環として学校図書館研究大会MIE部会報告より文教大学の清水先生が提唱される「壁雑誌」の制作、トレーシングペーパーを用いた雑誌の模写を行い、本格的な雑誌制作に着手するまえの予備的な学習を行った。

また、都立多摩図書館の東京マガジンバンクの見学を行い、ロシアに関連する特集記事を見つけるという課題を与えられ、ロシアという題材にどのような切り口で挑んでいくかを先の事例から考えた。

こうしたなかで、私たちは「隣人としてのロシア」を合い言葉に、日本とロシアに関連しながらも身近に感じられるものを模索した。

まず、「衣・食・住・文化」という軸が挙げられた。さらに「衣」であれば寒さや装い、「食」であればピロシキ、「住」として暖炉やサウナ、「文化」ではロシア音楽やおおきなかぶ、フィギュアスケートのようなスポーツといった案も浮上した。

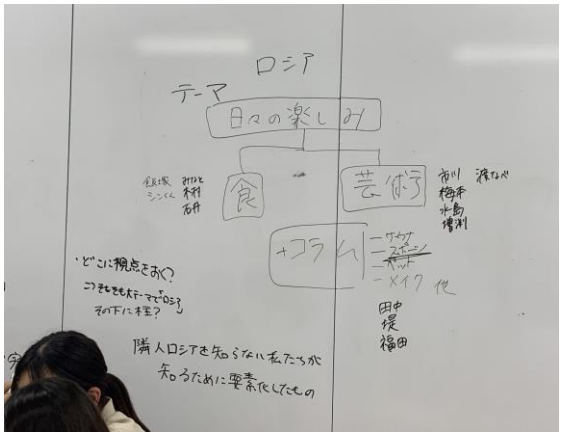
一方で、「私たちの隣人としてのロシアを知る」という植村の指導や「まとまりがない」、「記事化できる内容か」といった学生内での議論も続いた。

3. テーマの決定と担当決め

「衣・食・住」を大きく「暮らし」と設定し、対して「音楽・おおきなかぶ・フィギュアスケート」を「娯楽」と大きく括ったことで、テーマの方向性が定まっていく。「暮らし」班と「娯楽」班、それらをカバーする形で「コラム」班が決まる。メンバーそれぞれ興味によって班は分けられ、以降は班による話し合いで特集内容を決定していった。

また、編集長と副編集長を置いたことで、「編集長の考える雑誌」制作へと一貫性が増すこととなった。このとき、雑誌のコンセプトと狙い、特集テーマの輪郭が見え始める。

以降、編集長の下での議論、雑誌の版決めやページ数の設定、雑誌名決めが行われることとなる。



4. 雑誌とテーマ設定

雑誌という形式を取ることから、雑誌名を「re@lize」とし、副題に「何かに気がつく、考える」とおいた。「re@lize」はrealize、「気がつく」という意味の英単語から拝借した。また、@にはreとlizeを区切り@を組み合わせることにより、これまでの考えから少し距離を置いてみることを表している。また、@が「ここ・アドレス」を指すことから「ここ、この雑誌から」考えるということを示したものである。副題の「何かに気がつく、考える」は雑誌名の持つ意味を分かりやすく示し、読者に自ら考えることを呼びかけるものである。

雑誌のメインターゲットとしては「私たちとおなじ大学生」を仮定した。これは、マス・メディアではなくSNSから情報収集をし、日常生活で雑誌を手に取ることがほとんどない、ロシアへの関心が薄い日本に生きる学生という学生像のことである。よって、雑誌は当初仮定していた文字の多い研究論文掲載紙のような形式から、大学生にも手に取ってもらえるキャッチーさを要求されるようになった。

特集テーマは上にも示したように「ロシアについて考えるきっかけ」を想起するものであることを明確にするため、「知らなかった、ロシアがここに。あなたの中の、ロシアがかわる。」と掲げた。

また特集は全体軸として、私たちに身近であること、読者にも馴染みがあることを意識した。表3で掲げられる「半径5メートルのロシア」という題は、私たちや読者に身近な存在であるものを取り上げるという「身近」を「半径5メートル」という言葉で示したものである。

5. 雑誌の構成

本雑誌は特集2本とコラム3本によって構成される。人間の生活に欠かせない食という側面からロシアについて考える、特集「『おいしい』

だけじゃない！」と、日本とロシアの関わりから繋がりを再考する、特集「『おおきなかぶ』ーわたしたちをつなぐ物語ー」である。また、こぼれ話やマトリョーシカといったロシア雑貨にもフォーカスしたコラム、「スーパーフード1？そばの実」、「ロシアからのおくりもの」、「サウナ好き集まれ1世界一熱いロシア」の3本も掲載されている。

このほか表2、3には私たちから読者への問いかけとして「これはあなたに「考えるきっかけ」を提供する雑誌です。」と強く訴えかける。さらに、p3、p4ではロシアとウクライナ侵攻の概要、日本とロシアの関わりについてまとめ、これまでの歴史を振り返り、思考の一助とした。

6. 制作方法

特集の１つ目である「『おいしい』だけじゃない！」では日本人が経営しているロシア料理店、ロシア人が経営しているロシア料理店、ロシアの伝統的な料理である「ピロシキ」を販売している川崎市内のベーカリーにインタビューを行った。

特集ページ２つ目の「『おおきなかぶ』－わたしたちをつなぐ物語－」では作者不明、すでに亡くなっているため聞き取り調査を断念。文献調査、出版社別の『おおきなかぶ』の比較からロシアとの関わりを研究した。

コラム「スーパーフード蕎麦の実」、「サウナ好き集まれ！世界一熱いサウナ」の2本は雑誌研究、文献研究を中心に、また「ロシアからのおくりもの」はロシア雑貨店にインタビューを実施した。

ウクライナ侵攻をめぐるロシアとウクライナの動き、ロシアと日本の交流の歴史の振り返りは文献調査を行い、記事とした。

7. 特集「『おいしい』だけじゃない！」

食を取り上げた意図は、私たちが生きていく上で欠かせないものであり、日々口にする身近なものでもあると考えるためである。また、食文化はその国の特徴や人々の文化を反映している側面も持つ。食とはロシアだけでなく、日本においても身近であり、より国の固有の文化を感じられるものであると考え、ロシア料理について扱うこととした。

構成は「ペーチカ」と「マトリョーシカ」というロシア料理店2店舗と、専修大学に出入りし、パンを卸している「富士ベーカリー」へのインタビュー記事の３本である。ロシア料理店については、日本人オーナーとロシア人オーナーの２店に取材した。これは日本人から見たロシア人、ロシア人から見たロシア人を描き出すことを狙いとしている。富士ベーカリーについて、今回の雑誌のメインターゲットである「大学生」が、その生活の中でメインである場所が「大学」であり、その中で食を提供している場所という点から対象とした。

8. 特集「『おおきなかぶ』ーわたしたちをつなぐ物語ー」

特集のテーマである「知らなかった、ロシアがここに。あなたの中の、ロシアがかわる。」に沿いながら、副題の「半径5メートルのロシア」を中心に、身近に存在するロシアとして「おおきなかぶ」について記事制作を行った。

また、「おおきなかぶ」は、誰もが一度は読んだことのある昔話であろう。　「おおきなかぶ」を取り上げることとした理由に「おおきなかぶ」がロシアの民話であることを挙げる。日本でも親しまれる「おおきなかぶ」が、日本のものではなくロシアの民話だったという事実を知る日本人は多くないだろう。そこで、私たちが知らない、気づかないところにもロシアに関

係しているものがあるということを「おおきなかぶ」を取り上げることで、呼びかけようとした。

記事を制作するに当たり、主に論文での調査を行った。「『おいしい！』だけじゃない」のようにインタビュー中心ではなく、論文を中心とした調査による記事制作を選択した理由として、作者が不明であり、再話を行ったとするトルストイや翻訳者がすでに亡くなっていることを挙げる。この他、ロシアでは「かぶ」が昔から重宝されていた食材だったことなど、前提とする知識に関しても不十分であったことから論文を使用しての調査が適切だと考えた。

構成内容は、ロシア民話としてロシアで親しまれる「おおきなかぶ」、日本で定着した経緯と背景、ロシアと日本の「おおきなかぶ」からみた「おおきなかぶ」に関わる発見、日本で出版されている7冊の「おおきなかぶ」絵本の比較の4本である。

9. コラム記事

コラム記事3本は、メインの特集記事である食と「おおきなかぶ」だけではなく、日本で親しまれるロシアに関わる雑貨や施設などをコラム記事として取り上げ、雑誌内容の充実を図ったものである。

食に関連して日本と異なった親しみ方をされるそばについてまとめた「スーパーフード！？そばの実」では、文献を中心とした記事中にレシピを挿入することで、特集本筋では示すことがなかった読者に「考えながら、つくってもらう」という体験を通して「考える」を誘導する意図がある。

見開きで掲載した「ロシアからのおくりもの」は、ロシア雑貨として有名なマトリョーシカのほかロシア名産品である琥珀などを扱う雑貨店「マリンカ」に取材を行ったものである。店主の経験や思いから、ロシア雑貨ひいてはロシアへの興味を持ってもらうことを目的とした。

また「サウナ好き集まれ！世界一熱いサウナ」では、近年国内においてブームとなっているサウナを取り上げることで、ロシアに行かなくてもロシアを体験出来ることを読者に示した。

10. InDesignでの制作

編集作業は主にAdobe社がリリースしているInDesignを用いた。

制作に先立ち、InDesignでの編集経験はおろか、雑誌の編集経験が乏しいことが問題であった。そこで、烏有書林の上田宙さん、印刷学会出版部より石沢岳彦さんにご指導頂いた。

各原稿を担当した人が自分で考える暫定的なレイアウトデザインを学校内PCで作成。さらに、Adobe社のソフト操作性に比較的手慣れている3人で修正・入稿を行った。制作にあたってはGoogleドライブに修正版PDFをアップ、各々で修正点を指摘、それを受けて制作班が直していくという形式を採用。修正総数は数十回にも登り、編集の大変さを実感することとなった。

11. 制作から得た課題

制作を通じて、4つの課題が浮かび上がった。

1つは、スケジュールである。植村より入稿日が示され、逆算的に締め切り日を設定、全体で共有した。しかし、個人や担当特集ごとでの締め切り、作業時間の配分を設定できず、最終締め切り１週間前にようやくInDesignでの本格的な作業に移るといった事態が起こった。

２つ目に、取材や記事内容の質である。インタビュー取材に行く際に、取材相手やロシア料理についての事前準備が不十分であり、取材後にも追加で質問する、再び取材をするなど相手に時間を取らせてしまうことがあった。事前準備をしておくことで、取材相手からより詳しく話を聞くことができたと考える。記事に関しても、文章に起こしていく中で詳しく書きたいところが見えてきたこともあり、最初からある程度の方向性を持っていることの重要性を感じた。

3つ目に、InDesignでの制作における知識、経験不足と担当分量の偏りである。InDesignの操作は全員初めてであったこともあり、経験不足と知識不足がまず、問題となった。また、先に挙げたようにInDesignでの制作期間が非常に短く、大学以外での作業が求められることとなった。しかし個人でInDesignを所有している者は３人しかおらず、ここで分量の偏りが生まれてしまった。これもスケジュールの管理によって対処出来たことであると考えるが、知識に関しては長期的な学習が必要であったと考える。

最後に、資料やデータの保管、共有場所として使用したGoogleDriveでのファイルの乱立を挙げる。修正や新たな問題が発生するたびにファイルを挙げ直したが、同じようなファイル名、似た並びによってデータの位置が分からなくなり片っ端からファイルを開くなど時間が取られる場面が度々見られた。また、データの完成版も同じようにDriveを利用したがゼミ内での共有が上手くいかず、結果的に修正前のデータでの入稿となるページがあった。こうしたインターネットを介した共有、伝達には常に二重、三重での確認が必要であり、同時にインターネット社会を生きる私たちの最大の課題である。

12. 学びと結び

私たち植村ゼミ11期生はコロナ禍での入学、1年次のオンライン授業、2年次のオンラインと対面のハイブリッド授業という極めて異例の学生生活を送ってきた。4月、授業形態が対面に切り替わり、ようやくお互いの顔を知ることになった。挨拶もそこそこに、植村より示された「雑誌制作」という1年がかりの目標はあまりに未知数で、本当に形になるのかと不安になったことを覚えている。

手に取る機会も減った雑誌にあえて取り組む意味とは。ロシアを取り上げる必要性とは。そして何より、雑誌をつくることができるのか。様々な思いのなかで、今回無事に雑誌をつくりあげ、こうして発表できることに言葉に表せないほどの安堵を感じている。

雑誌制作を通じ、普段触れない分野に関する調査や取材、それに基づいた記事作り。また、期日から逆算したスケジュール調整や管理といった、これまで行ってこなかったことへの挑戦が多々あった。雑誌を作り終え確かな達成感を感じると共に、新たな視野や知見を得ることができ、個々人のレベルアップもできたのではないだろうか。

【謝辞】

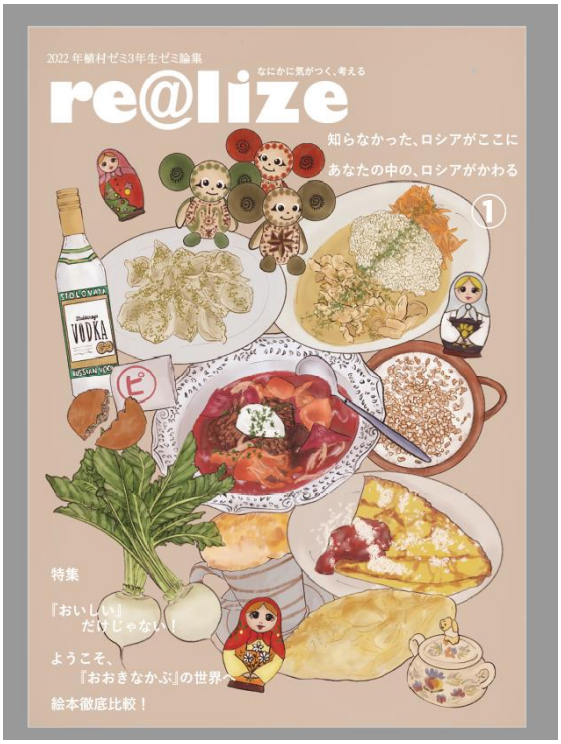
本雑誌の制作にあって、快く取材に応じていただきました関係者の皆様を始め、InDesignのご指導いただきました上田宙様、石沢岳彦様、短期間で仕上げていただきました三美印刷様、さらに雑誌の価値について多くの知見をいただきましたMIE研究の成果に感謝申し上げます。

『re@lize』
専修大学文学部ジャーナリズム学科
植村八潮ゼミナール3年生

編集長：渡邊香月
副編集長：梅本優希
アートディレクター：田中七海

食班
班長：木村和美
メンバー：湊梨々子、飯塚直也、シンジュヨン、石井花菜

おおきなかぶ班
班長：増渕晴菜
メンバー：水島萌々香、市川茉乃花

コラム班
班長：福田詩織
メンバー：堤萌恵

指導教員：植村八潮